

ヒメトビウカ越冬世代幼虫の縞葉枯病ウイルス保毒虫率が高まっています！

ヒメトビウカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査の結果、保毒虫率が県平均7.0%となり、過去10年で最も高くなりました。また、ウンカ類幼虫の越冬前密度調査では、県平均60.6頭/10㎡(平年比312.2%)と多い状況です(図1)。

地域別では、県中南部で保毒虫率が高く、10%を超える地点が見られました(表1、図2)。これまでも保毒虫率が高かった県南部では、前年黄熟期の発病株率でも10%(要防除水準)を超える地点が複数見られたことから(図3)、本病防除対策の徹底が必要となっています。また、これまで本病の発生が少なかった県中部でも徐々に発生が増加しており(図4)、保毒虫率も高まってきたことから、県中部においても防除対策を行う必要があります。

平成25年産稲作に向けて縞葉枯病防除対策をしっかりと行いましょう。

表1 ウンカ類幼虫生息密度とヒメトビウカ越冬世代幼虫の縞葉枯病ウイルス保毒虫率

調査地点	H24		H23 保毒虫率(%)	H22 保毒虫率(%)
	生息密度 (頭/10㎡)	保毒虫率(%)		
県北部	大田原市戸野内	36	0.8	0.0
	大田原市蛭畑	3	0.8	1.6
	那須烏山市滝田	45	1.6	1.6
	さくら市蒲須坂	3	1.1	1.6
	高根沢町花岡	6	1.6	0.0
県中部	芳賀町祖母井	3	(0.0)	(0.0)
	真岡市青田	0	13.7	7.3
	宇都宮市横山町	0	7.7*	0.0
	日光市小林			(0.0)
	鹿沼市酒野谷	18	9.7	3.2
県南部	小山市小葉	84	12.1	24.2
	小山市下石塚			12.9
	小山市石ノ上	12	3.2	
	壬生町助谷	12	6.5	3.2
	栃木市惣社町	27	2.4	10.5
	栃木市大平町真弓	510	25.4*	24.2
	栃木市藤岡町富吉	48	14.1*	10.5
	佐野市堀米町	162	4.0	4.0
	足利市上洪垂町			0.0
	平均値	60.6	7.0	7.0
平年値	19.4			
平年比(%)	312.2			

注：ヒメトビウカ幼虫は平成24年11月下旬に予察ほ又は同周辺ほ場の再生稲又は畦畔から採集。保毒虫率はELISA検定。平成24年検定虫数は1地点124頭としたが、さくら市は91頭、芳賀町8頭。()は検定虫数10頭未満のため参考値。空欄はデータなし。
※は2地点平均。

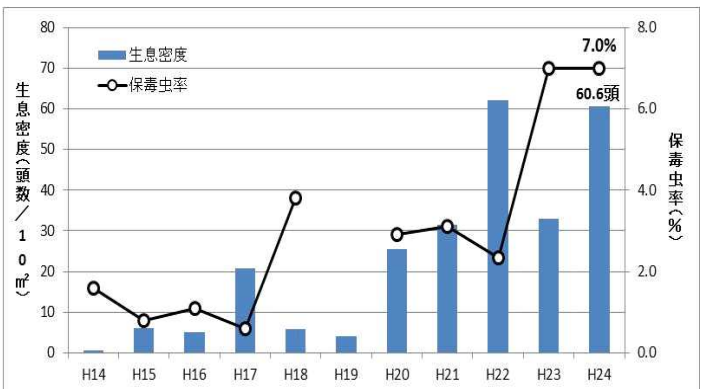
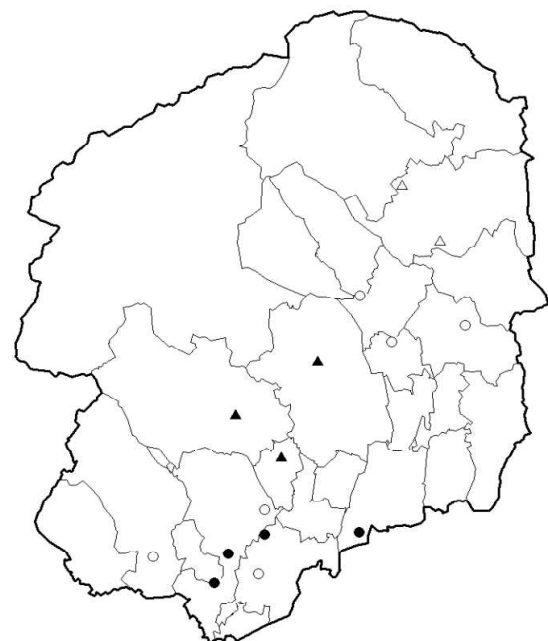


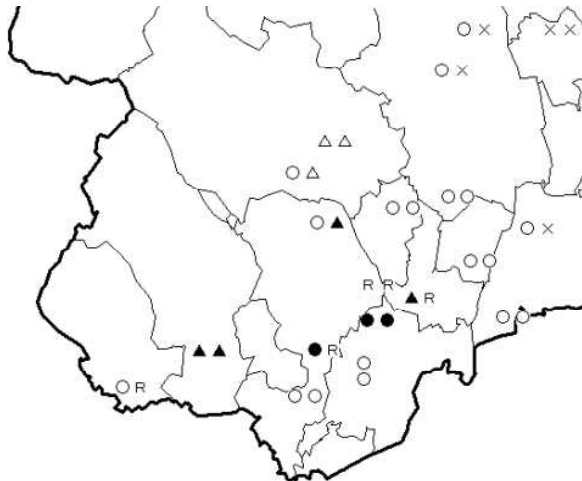
図1 ウンカ類幼虫生息密度及びヒメトビウカ越冬世代幼虫の保毒虫率の推移



国土地理院承認平14総複第149号

保毒虫率(%)	0	0.1~0.9	1~4.9	5~9.9	10以上
記号	×	△	○	▲	●

図2 縞葉枯病ウイルス保毒虫率の状況



国土地理院承認平14総検第149号

程度	無	散見	少		中・多・甚
発生株率(%)	0	1未満	1~10	11~20	21以上
記号	×	△	○	▲	●

R: 抵抗性品種の作付区域

図3 黄熟期の縞葉枯病発生状況
(平成24年8月下旬～9月上旬 県中南部抜粋)

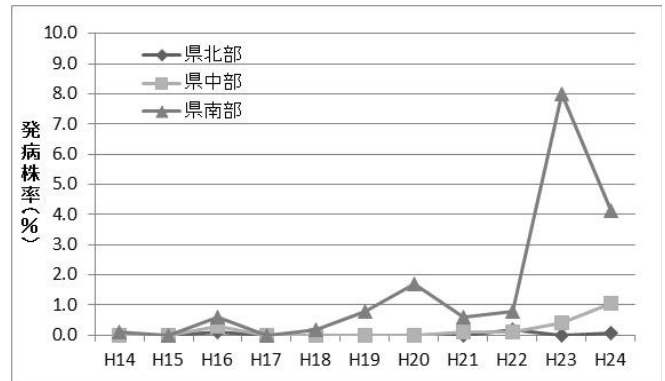


図4 8月上旬縞葉枯病発生株率の推移

【防除対策】

- 抵抗性品種（あさひの夢、とちぎの星）の作付割合を増やす。近年増加している飼料イネも、抵抗性品種（クサホナミ、はまさり等）に切り替える。
- 保毒虫率が高い地域で罹病性品種（コシヒカリ、なすひかり、べこあおば、モミロマン、リーフスター等）を作付する場合は、本ウイルスを媒介するヒメトビウンカの防除を以下の箱施用剤で行う。ウンカ類幼虫の密度が高く、前年縞葉枯病の発生が見られた地域で罹病性品種を作付する場合も同様に防除する。

イミダクロプリド箱施用剤(商品名アドマイヤーCR箱粒剤等)や
クロチアニジン箱施用剤(商品名ダントツ箱粒剤等)、又はこれらを含む混合箱施用剤

- ※フィプロニル箱施用剤(商品名プリンス粒剤等)は、県内で薬剤感受性が低下したヒメトビウンカが確認されているため、保毒虫率が高い地域では罹病性品種に使用しない。
- ※箱施用剤の使用や切り替えは、地域全体で行うと防除効果が高まる。

詳しくは、農業環境指導センター(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/>)までお問合せ下さい。
当センター携帯サイト(<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用下さい。

Tel(028)626-3086 Fax(028)626-3012